



ハンサム金次郎シリーズ⑥
豊田自動織機に迎えられた
食新読書会文部像



だより



大会参加者記念写真(曲阜師範大学本館・孔子像前にて)

国際二宮尊徳思想学会 - 第8回(曲阜師範大学)大会 -



国際二宮尊徳思想学会第8回大会は、2018年10月20、21の両日、中国山東省曲阜師範大学の党校教室で開催されました。テーマは《「永安社会」の構築をめざして—報徳思想と儒学振興—》。儒学と報徳の関わりの再検証と、近現代社会への効用を問うものです。1831(天保2)年荒廃した農村を再建し、農民救済に大きな成果をあげた二宮尊徳の仕方は、小田原藩主大久保忠真から『論語』の「以德報徳」にあたと伝えられ、その後尊徳は自



身の仕方を「報徳」としています。孔子の故郷曲阜での大会は、孔子と尊徳の学縁を実感し、日中文化交流の歴史の奥深い関わりを再認識する機会にもなりました。

報徳と儒学 —新たな永安社会を願って

〈大会の概要〉

大会は2018(平成30)年10月20~21日2日間、曲阜師範大学キャンパス党校教室で開催され、中国側から70名、日本側から45名が参加しました。大学を代表

して馬善軍副学長の歓迎の辞、来賓の湯重南中国社会科学院世界史研究所教授と神田健策弘前大学名誉教授の祝辞をいただき、次いで基調講演として蘇山恭彦東京学芸大学元学長・大日本報徳社社長の「近代日本の光と影と報徳思想の現代的意義」、北京日本学研究中心前主任徐一平教授の「報徳思想から考えた中日の教育問題—私と二宮尊徳思想の接触から—」の講話を受けました。午後からは翌日にかけて17編20名(中国14、日本6)の研究発表が行われ、最後は「永安」生活の探求と報徳実践の意義についてのシンポジウムをもって終了しました。

〈研究発表の所感と評価〉

研究発表は五部門からなり、第1日目はI【儒学と報徳思想】(演題4編・発表者5名)、II【儒学と報徳の近世・近代への影響】(演題4編・発表者4名)、第2日目は、III【報徳思想・仕法の原点へのアプローチ】(演題3編・発表者3名)、IV【報徳思想・仕法の近現代への活用と実践】(演題4編・発表者5名)、V【永安社会への課題】(演題2編・発表者2名)とするテーマのもとに、それぞれ新たな視点での成果発表となりました。

研究報告終了後、中国側は大連民族大学王秀文元教授から、日本側は報徳博物館の宇津木三郎研究員からそれぞれ所感が述べられました。

王秀文教授は日本の儒学の受容について、Iの陳東/高遠「以直報怨に関する二宮尊徳の解釈」、俞慰剛「中国伝統思想に対する揚棄と伝承」の報告に注目、尊徳をはじめ日本人が独自の解釈により、儒学への理解と大衆化を深めたことが具体的に示されたと評価し、中国でも報徳思想の理解、普及には独自の解釈があって良いとしています。

また、IVにおける宋曉凱・権慶梅「中国における報徳思想の伝播に関する一考察—受容者と媒介を中心に—」による報徳仕法の普及が不十分だ



大会会場全景(党校教室)

とする批判に対し、2000年の本大会発足当初は皆無だった研究者が第8回大会を迎えた今日は100人を超え、論文、著書も多く一定の成果も上がっていると弁論。一方、中国農村

の復興、三農問題への尊徳思想の活用は当初からの課題認識であったとし、その実効を上げるためには、若い世代への知識の普及と自主的な論議環境が必要だとする本論の主張に共感が表明されました。



研究発表 I 左から座長：左漢卿、発表者：于秋芳、俞慰剛、蘇敏裕、陳東

宇津木研究員は、Iの岩手大学教授蘇敏裕の「二宮尊徳の『詩經』伐柯編解釈」において、引用『詩經』の原典確認により資料批判の精度があげられたことを評価。IIの池尾愛子「J.デューイの実用主義と田中王堂の二宮尊徳研究」において、王堂が斬新な視点で尊徳を人間中心主義のヒューマニストとし、新しい尊徳の人間像を提示し、明治40年台の報徳運動に実像の認識を高めた可能性を指摘。IIIの明治維新直前の仕法終焉期の苦悶を報告した飯森富夫「日光神領仕法をめぐる農民らの疑念と二宮弥太郎の苦悩」において、明治維新直後の報徳資料の保全に全力で対処してきた関係者の尽力にも言及、またIVの田代一樹「御殿場愛郷報徳社の概況と文化祭を通じた地域づくり」では、富士山麓自衛隊演習地の地代収入を、地元報徳社が地域の文化活動のほか災害救済、公共的な事業や行事等への推進などで報徳的健全運営を継続していること、またVの露木順一「二宮尊徳思想と持続可能な地球の創造についての一考察」では、地球温暖化や飢餓、国際紛争など今日の喫緊の課題に対する報徳的な対処の可能性への熱い提言にも、評価の目を向けていました。

《シンポジウムにおける提言と参加者質疑》



左から金勲(司会)、書普貞、神田健策

北京大学金勲教授の司会で進行し、最初の発表は神田健策教授の「日本協同組合の源流二宮尊徳と総合農協の意義」。日本の協同組合研究の先鞭となった北海道大学大田原高昭元教授の指摘を継承し、〈いもこじ〉の集团的合意形成が直接民主主義、個々の主体形成という役割を果たし、〈五常講〉が今日の信用協同組合につながる点などから、現代の総合農協が抱える大資本・経営大型化への課題対処に、報徳仕法援用の有効性を期待したものでした。

次は、中国農業大学書普貞教授の「二宮尊徳の「心田開発」と精神貧困の削減」です。これまでの政府依存下で荒廃した農村の振興策として、農民の精神的覚醒「心田開発」によってやる気を起こさせることが最重要だとし、農民の幸せが自立、自発性にあることが自覚できれば、トップダウンによる強制的な開発改革より遥かに大きな効果が期待できると主張、さらに、奉天地区の貧困農村の実態につき写真による詳細な報告がなされました。

続いて金勲司会のもとで会場参加者も交えて次のような質疑応答が交わされました。

劉金才：事例のような貧困農村は今では2-5%程度で、その後の変化が紹介されていない。陸穎：先日北京のテレビで貧困農村が33県あると放送していた。以前は人民公社が発達しているのになぜ農民の生活は困難なのかと思ったが、文革の末期頃に比べ今はだいぶ良くなった。金勲：問題は残されているが改革開放で農村は大幅変わってきた。武部温恭：青島から曲阜へのバスから見た農村は畑の手入れ、畦草の刈取など良く行き届き、豊かだと実感した。貧困農村での生産意欲減退が働き手の体調不良が原因なら、ライフラインやインフラ整備を先行してから心田開発をしてはどうか？ 尊徳翁もそうしていた。神田健策：農民はかつての人民公社への反感が根強い。2006年制定の農民專業合作社がこの10年で夥しい数が設立され、それは世界の協同組合の原則を取り入れたものだが必ずしもその趣旨が反映されていない。リーダーの多くは商人や村の書記だが、組合の意義を理解

した人材の輩出が望まれる。劉金才：普先生の調査は施政者に提供されたか？ 具体的な対応策が大事だ。書普貞：2016年から20年にかけて河北省のある地域の「貧困脱却と開発の五カ年計画」を学者グループで策定したが、施政者や地方幹部は受け入れた。実学主義でやっている。金勲：研究課題はたくさんある、現実に密着した研究が必要だ。

《孔子の遺跡・遺産の見学》

大会終了後の3日目は、孔子(BC.551~479)の遺跡の見学です。春秋戦国時代の魯国の都・曲阜城(現

在の城跡は明代)の開門式では、おごそかな官人の口上に始まり、鎧姿の城兵や

華やかな衣装の官女たちの演舞、群舞、そして『論語』の一文「有朋自遠方来不亦楽乎(朋あり遠方より来たるまた楽しからずや)」の文字を掲げた艶やかな舞で歓迎を受けました。

城の内外に歴代王朝の庇護を受けてきた広大な遺跡群があります。高さ3.35mの孔子像のある大成殿を中心に末裔をも祀る「孔子廟」、曲阜一帯の莊園を統治する政庁と一族の居住区域の「孔府」、そして城外に隣接し、孔子と特定子孫10万基の墓地を擁する「孔林」が「三孔」として継承されてきました。しかし辛亥革命後の近代化に伴い、魯迅ら知識人から封建制度を助長する存在として指弾され、文化大革命では「批林・批孔」運動で凄まじい破壊を受け、危機に瀕しました。改革開放後は貴重な文化財としての復興が進み、世界遺産に登録されています。最後に大きな芝生の孔子の墳墓に参拝。2500年ほど前の伝説的な歴史が身近に感じられたのは歴史遺産の功徳でしょう。

儒学の「徳」に学んだ尊徳は、生活救済の実益に結び付けて独自の「報徳」仕法を創出しました。この学会を機縁に永安社会の実現に向けて「以德報徳」の活用が期待されます。



曲阜城開門式



孔子の墳墓(孔林)

発行 公益財団法人報徳博覧会
〒250-0013 小田原市南町1-5-72
電話0465(23)1151・発信0230-649044

報徳博物館

発行 公益財団法人報徳博覧会

開館対応もいたします。

*なお、団体の場合、前もって申し込みがあれば

●開館時間：9時30分より16時まで

※入館期間は休館となります

●開館日：毎週4日 土・日・月・火曜日(水・木・金曜日及び祭日代休日、年末年始夏休み、メ

現在、開館日・開館時間は以下の通りです

開館案内

報徳丘陵で見た雲の花畑



れば幸いです。
学習や体験が活かされ
自慢に。今後も報徳の
た「ことわり」を大切に
についてよく知ってい
そこで働く日本人社員よりも「私の方が金次郎さん
宮神社で撮った金次郎像の写真を載せたところ、
有「限」会社に就職、入社早々、社紙「astaba」に二
卒業後は青島で父の「日系企業」青島秀愛食品
かったそうです。

そば「やお振る舞いの」うなぎ弁当などが美味し

なればと期待され、移籍成立となりました。
シンボルとして金次郎像が若い勤労者たちの励み
ていました。工夫と創造力を奨励する報徳。その
もらいたいと依頼され、宮司は神社境内に預かっ
開業するにあたり自宅の庭の金次郎像を保護して
折りしも川崎の某建設会社の経営者から、会社を
像はないだろうか」と草山宮司に相談がありました。

長野崎晃平
は、若者た
ちの創造的
勤労の手本
として二宮
金次郎像を
設置しては
どうかと考
え、ふさわ
しい既存の



左から草山昭富司(当時)、中村万里子氏、
野崎晃平(二宮金次郎像)

ハンスム金次郎シリーズ⑥ 豊田自動織機に移籍した金次郎像

21世紀に至り、豊田自動織機の当時のセンサ
性を導く経営理念で貫かれています。

訓「豊田綱領」五項目は、倫理性、創造性、連帯
年に子息らによってまとめられた佐吉翁の経営遺
あったといわれています。没後の1939(昭和14)
信奉者であった父伊吉のもとで培われた報徳が
トヨタグループの本家筋に当たります。佐吉翁の思
想、行動の原点には、遠州において熱心な報徳
機は、国際的な大企業トヨタ自動車を中心とする
豊田佐吉翁(1867～1930)創業の豊田自動織
報徳博物館の小笠原清が参列しました。

2009年6月19日の午後、若者達に高度な技術
訓練を施す豊田自動織機技術センター「ユニゾセン
ター(愛知県大府市江端町)の中庭で、食料品
金次郎像(石彫109cm)の除幕式が行われました。
野崎晃平センター長以下役員、所員、研究・調
練生およそ30名と共に、像の寄贈者小田原報徳
二宮神社草山昭富司、二宮家から中村万里子氏、

秦帆帆さんは2018(平成
30)年9月13日から翌年3月9
日までの約半年間、当博物
館に留学研究生として在籍し
ました。報徳著書の適切な
中国語訳をめざし、神谷慶
治著「二宮尊徳とあすの農
村」(抜粋)における直接引用
語の翻訳実践報告と題する
卒業時の論文・曲中修論大
字日語キヤンパスにて



修士卒業論文に取り組みました。その成果は、若
干要約して「報徳学」16号に掲載されています。
潜在中は博物館の講座(中国を知ろう会)におい
て「中国の年寄りは何をしているのか」「中国農村に
おける(留守児童)の問題」「中国の(北方)と(南方)
の違い」「来日生活の感想」と題し、4回にわたって
講師を務めました。

年末年始には、神社の餅つきや初詣も体験し、
茶道や伝統料理も習いました。休日には近郊も見
物、小田原郊外の早春の菜の花畑、江ノ島から眺
めた富士山の夕景、箱根の「ガラの森美術館」の
展示などが印象に残り、また鎌倉小町通りの「抹茶